

「底が突き抜けた」時代の歩き方 350

人間としての「闇」はどこまで表現されたか - 映画『夜を賭けて』

作家の山田風太郎の『戦中派焼け跡日記 昭和21年』の1月1日（火）は、《詔書 発布。悲壮の御声。ノ日本史上空前絶後の暗黒の年明けたり。》で始まる。敗戦十数年後の在日朝鮮人たちの生活を描いた映画『夜を賭けて』を観た直後だけに、頁をめくりながら、自然と（在日）朝鮮人という単語を探す目付きになっている。あまり見当たらないけれども、それでも何箇所か目に付く。それを次に拾ってみる。

8月3日（土）

朝3時起床。高須さん山形へゆくをもって渋谷一番の省電に乗るべく薄明の途を玉電^{いま}まだなければ徒歩にて送る。渋谷へ着きたる時夜は全く明けたり。マーケットの跡再び荒涼としたる地となり所々木材をかためて積み上げあり。白き標立ち曰く米軍東京憲兵司令部の命により昭和21年7月20日午後6時以後渋谷駅附近の露店を閉鎖す。当範囲内の露店は7月20日午後6時以後48時間以内に撤去すべし。7月20日午後6時以後当範囲内に露店を設くるを許さず。該当者は日本人、中国人、朝鮮人の如何を問わず、渋谷警察署長と。この拳に出でたるは近時中国人朝鮮人横行し、日本における新円の半ばは華人有し、あとの半ばの中の半ばは朝鮮人有せるよし。（1/4を有せる日本人も、新円はほとんど農漁村に集るといふよし）故にこの事態を黙認せんか日本経済の破綻を来すをもって、今次の弾圧を下せりという - 朝華の民のみ弾圧を下す能わざる悲しむべき時代なれば日本商人をも含めて - 評判也。

渋谷よりの帰途ビルの硝子、壁、樹々、路^{ことごと}悉く薄赤う染まりたるを見てふり返れば、東天紅の潮流せるがごとし、米軍軍用車緑の箭曳くがごとくドライブして馳る。ちらと見えたる座席、進駐兵と断髪の日本娘、悠々と接吻しあり。午前沖電気へ橋本氏面会に行て休日也。今沖電気は一週のうち、日土両日休みなるがごとし。軍需工場の末路憐むべし。品川駅にうずまる引揚民の姿、ボロボロの服に大いなる汚れたる荷背負いて、茫然たる瞳に祖国の灰燼を見る。その顔煤と苦悩に黒くくまどらる、悲憤禁じ難きものあり。

一日帝都に来れるB29の大編隊の平和訪問。笑める顔一つもなし。笑めるは苦が笑い也。唯切齒^{ただ}の聲聞ゆるのみ。

「日本にも飛行機があったんだヨ、だけど戦さに負けたから無くなったのサ、一台も無くなったのサ。坊も大きくなったら、もう一ぺん戦さに勝って飛行機に乗るんだヨ」と、裏の難波巡査の妻君幼児にいいきかず声未だ耳に残る。米人日本人を目してラック・オフ・ユーモア（可笑しみを解せざる国民）となす。無差別爆撃せる都市の上空を飛びて

威嚇するがユーモアか何が可笑しきや、日本人は復讐の日まで再び笑まざるべし。

夕、土田氏来る。進駐軍用の麦酒^{ビール}上前^{うわまえ}はねてこれを仕入れ大儲けする予定也と。一本 20 円くらいで無尽蔵に入りこれを 50 円以上に売る由。台湾人を使うとのこと。

8 月 11 日 (日) 晴

(略)

近傍の朝鮮建国促進同盟(?)のクラブの二階に半島青年ら放歌鼓舞して近隣^{はなは}を圧す。日本人小さくなりてこれを仰ぐのみ。近来朝鮮人の横行目に余り切齒するもの甚だ多し。否日本人の談話中必ず将来朝鮮に目に物見せてくれんとの激語沈鬱に囁き交わさる。されど余思えらく、朝鮮人の拳動^{かど}のみに目に角立つるはあたかも姑^{もつと}の嫁いびりのごとく大人げなし。日本人は偉大なる国民との信念を持たざるべからず(尤も今は絶望に絶望を重ねるほど将来の捲土重来の潜勢力を増すことにならんと考うる故に、日本人の自慊は自ら制するを要す)。怨むならソヴィエットを怨むべきなり。米は堂々と勝ち、勝利のあとの態度も比較的堂々たり。これに対する返報も日本は堂々たるを要す。されどソヴィエットに対する怨は陰鬼のごとく胸にたぎらすを要すべし。彼や窮鳥懷に入るをシカと認めて後その胸に刃刺したる獵師のごとし。ポツダム宣言を自ら破りて吾將兵を未だシベリヤに苦役せしむ。満州より巨大の施設を奪いて、賠償はまた別にこれを取らんとす、その貪欲にして酷薄非道なる全日本人の干載に忘れ得ざるところなりとす。

『文明論之概略』巻之六読了。諭吉の愛国心切々と胸を叩き、叩き、叩く。噫、諭吉こそ明治の日本人中最大といいても可なるほど巨大なる愛国者なり。この書今の日本人の座右銘とするの必要あり。

11 月 27 日 (水) 雨

(略)

夜本屋より員ちゃん^{かず}来る。本屋の末弟 28 才、満州の会社につとめ、一ヶ月ほどまえ命からがら引揚げて来た人。音に聞えた日本ザムライの精粹関東軍を一週間に潰滅^{かいめつ}したとソ連はイバっているそうだが、何 8 月終戦当時は関東軍は既にレイテ、沖縄で消耗し、その勇姿は満州の野になかったそうである。それだけに、日本人は悉く^{ことごと}帝王であった満州の混乱と震撼は激烈で、実に何ともカンともいえない悲惨なものであったと。

日本の農民が貧乏だといっても、ソ連軍ほどひどいボロ服は着ていない、またあんなに無智低劣な軍隊も世界に類があるまい。掠奪、暴行、放火、破壊、殺戮^{さつりく}至らざるなく、いかなる將兵も、腕には日本人より奪った腕時計を皮膚の見えざるまでにまきつけ、何ぞといえばすぐにピストルをつきつける。一物を一尺動かすにも日本人を狩り出してこれをコキつかい、火のつくような酒をコップであおりながら放唱乱舞、日本人を殺してその血の海の中で日本娘を姦し、遺骨箱を踏みにじってその金歯を奪い、とにかく恐ろしく精力的な軍隊らしい。このソ連軍の去ったあとで支那軍や満鮮の民衆の掠奪が始ま

り、日本人は実に天地に身を容る^いるところがなかったという。これらはもとより日本人の不徳の招いたことではあるが、それかといって決してソ連や支那朝鮮の有徳を示すものでもない、思えば彼等も気の毒な話である。彼等は一時の狂奮にくらんで百年後の子孫の血潮の遠因をつくっている。しかし、ソ連は実に骨をすす^{やぶ}っても飽きたらぬ日本永遠の敵である。米国は少くとも堂々と日本と戦って日本を敗った。その結果として、惨酷な賠償を強要し、原子爆弾棚上げの八百長裁判を行っても吾々は文句はいえない。男らしくこの苦痛に耐えよう。しかしソ連は何であるか！ いきなり背後から刃をつたてるような卑劣奸悪な国ではないか！ しかし日本の女は全然ダメである。敗戦直後は白装束で自決するようにも見えた連中が一月もたたぬ中に丸坊主頭に紅白粉つけて振袖^{ぶりそで}じゃらじゃらとソ連兵と腕をくんで歩き出したという。内地と同じ。マンとは男性のみをあらわすごとく日本人といえば日本の男のみをあらわすのであろう。しかもそれが軍人の妻君連中が一番ひどく墮ちたという。それまで威張っていただけ、また融通のきかないだけ一層甚だしく目立ったのであろう。員ちゃんも満州の野を逃げまわっていた間の苦労がなおも残って顔はむくみ、身体中デキモノだらけ、脚は指で押せばポッコリ穴^{しほら}がくぼんで暫くもとへ戻らない。

敗戦直後の日本の雰囲気を知るために、11月30日の日記も次に抜き書きしておく。《山によってはもう雪が見え初めたそう。昨日一昨日二日間に皆が食った米一俵あまり、農家なればこそ出来たわざである。花は100円が最高で、最低が20円、親戚だと500円ぐらいが普通になるだろう。インフレ時代ではある、義昌さんと話す、戦争の話。——ミッドウェー海戦の悲劇、古賀司令長官の不評なりしこと、戦艦大和の末路、戦争末期の吾将兵の素質低下 etc、「敗けた」この観念は皆はっきり今は痛感している。しかし、それに満足など勿論していない。民主主義だの何だのよろこんでいるのは新聞の浮ッ調子な紙面だけで、日本^は全国民の胸中鉛のごとく印せられた沈痛なる絶望の念。どこに行^{ただ}って誰の胸の皮膚を剥いでも見出されるのは再起復讐の心のみであることを発見する。唯、その方途に至っては何人も首を垂れるのみ。唯今は頭を下げよう、じっと歯をくいしばり顔は笑って頭を下げよう、そのことより今はどうしようもないと皆いう。》

当時24歳の医学生の眼で綴られた日記である。敗戦直後の彼を含む当時の日本人が、彼曰く、「日本史上空前絶後の暗黒の年」をどのような思いで過ごしてきたのか、その一端が以上に抜き書きしてきた日記の断片からでも窺われる。戦後生まれの世代からすれば、父や祖父の時代であり、50数年前の、ついこの間の出来事であるのに、遠くの過ぎ去りし昔のこ^このように感ぜられる。月日が経つのは早いということではない。日本人が嫌な戦前や敗戦直後の記憶を忘れ去ることを願ってきたからではないのか。生存本能として人間には嫌な出来事を忘れ去る記憶忘却装置が働くことは知っているが、辺見庸の連載エッセー『反時代のパンセ』（『サンデー毎日』02・12・22）によれば、嫌な記憶であることが意識されなくとも、人間には現在の生活と結びつかない記憶は自

然さを装って忘れ去られていくものであるらしい。彼はある雑誌で山西省の陸軍病院勤務で、《1942年ごろ多数の中国人に「生体手術演習」をした事実を告白し、それを深く反省した内容》の元軍医 A 氏の講演要旨を読み、書いている。

《A 氏にとってはじめての手術演習のとき、実験台となったのは二人の中国人男性の「生体」であった。一人は促されるまま手術台に臥したが、もう一人の農民ふうの人物は兵士が押しやっても押しやっても後ずさりをして、A 氏のそばまできた。師団軍医部長、病院長らも立ち会っている。「意気地なし」といわれたくないと思い、A 氏は両手で中国人の背中を手術台のほうに押しやったという。部隊軍医が「生体」に対し腰椎麻酔をほどこし、さらに全身麻酔に入ろうとした際、A 氏は思わず「あっ、消毒は？」と声を発してしまったのだが、前任軍医から「どうせ殺すんだから」と笑い返された、と講演要旨にはあった。

病気でもない生きた人間の腰を三回も切開し、虫垂切除、腸管縫合、四肢切断、気管切開……と外科軍医らは中国人を切り刻んだ。A 氏はそのとき介助役だったが、「興味にかられて」右前腕切除を「練習した」という。一人は絶命し、もう一人はまだ最期の呼吸をしていたが、A 氏がクロールエチール液を静脈に注射すると呼吸がとまった。A 氏はこうして前後 6 回にわたり 10 人の中国人の手術演習に「はじめは恐る恐る、二回目は大胆に、三回目からはみずから進んで」関与したのだという。「生体」の腹に拳銃弾を撃ちこんでから麻酔も酸素呼吸も強心剤も使わずに弾丸摘出の手術演習をして、悶絶のうちに死亡させたこともあった。A 氏は「北支にあるすべての軍病院で『手術演習』が実施されていたことを知った。関与した軍医、衛生兵、看護婦はおそらく数千人にのぼることだろう。だが、多くがこの事実を語ろうとはしない」と述べている。なぜか、と彼は問う。恥じてか、恐れてか。否、と前置きして彼は自答する。「意外とおもわれるだろうが、忘れて思い出せないのである」。まったく悩まずに実行したために罪を犯したという意識が薄い。だから忘却する。そのくだりが私の胸に刺さった。A 氏は敗戦後、中国の捕虜収容所でやっと犯行を思い出し、「生体手術演習」で殺した中国人の母親の手紙を読まされたのをきっかけに過去を深く反省しはじめたのだと語っている。》

平然とは書き写せない残酷な内容であるが、辺見庸同様、「忘れて思い出せない」という「くだりが私の胸に刺さ」る。もちろん、日本人だから特殊なのではない。人間とはそういう存在なのだと思う。「まったく悩まずに実行したために罪を犯したという意識が薄い。だから忘却する。」と説明される。中国人といえども我々と同じ人間であるのに、「生体」実験をするのに「まったく悩まずに実行」するということがありうるのだろうか。ありうるのである。まず戦時下の日本の植民地であった中国での「生体」実験であるという背景を抜きにして考えることはできない。被支配的な関係にある中国人は支配している日本人と同等の関係とはみなされていなかったということを、このことは意味する。アメリカ白人にとって、アフリカ大陸から奴隷として拉致されてきた黒人が自分たちと同じ人間とはみなされていなかったのと同様である。今日でも一部の狂信的な白人の間では黒人差別が激しく行われているように、相手を自分と同じ人間

とみなして付き合っていくことは大変なことなのだ。

元軍医 A 氏が中国人の「生体」実験に「はじめは恐る恐る」であったのは、「生体」実験に不慣れであったためであり、相手の中国人に人間としての痕跡を認めていたからだと思われる。「生体」実験が避けられない環境にいることを覚悟するにつれて、「二回目は大胆に、三回目からはみずから進んで」関与していくことになる。このことは、「生体」実験が普通の手術として取り扱われていくにつれて、相手の中国人が自分と同じ人間として全く扱われなくなっていく加速度をあらわしている筈だ。つまり、やがて死ぬことになる（殺すことになる）「生体」実験とは死体実験に等しかったから、殊更 A 氏たちの意識にのぼることはなかった。罪の意識から逃れるために記憶忘却装置が働く（かせる）のではなく、もともと罪の意識がないために忘却してしまうのだ。

人間という存在は途方もない闇の深さに放置されていることを、改めて思い知る。「まったく悩まずに実行したために罪を犯したという意識が薄」くなるのは、すべての戦場に当てはまる筈だ。逆にいえば、戦場に兵士を送るにあたっては、殺人について「まったく悩まずに実行」する訓練を施していく。そうすれば「罪を犯したという意識が薄」くなり、忘却がすぐに訪れる。いうまでもなくマシーンは悩むことがない。人間であるが故に悩むのだ。ということは、悩まない人間はマシーンに近づくということである。要するに、悩まなくなった人間は人間であることから遠ざかっていくといってよい。悩めば悩むほど、忘却から遠去かる。そう、忘却しないためにも悩むべきなのだ。したがって、忘却とのたたかいは悩み抜くことの内にある。それでも人間は「まったく悩まずに実行」する環境に放り込まれて、たえず忘却に晒されている。ではどうすればよいのか。

《まるで胎内めぐりの闇の途次にきたす錯視のような、不可思議な絵》にじっと見入るなかから炙り出されてきた、元軍医の中国人「生体」実験に関する講演要旨について記した辺見庸は、こう締め括る。《闇の絵はまだ眼前にあった。中央の暗い窓ガラスのなかではいったいなにが蠢蠢となされているのだろう。19世紀の闇がハルビンと山西省の闇を結び、いまに流れこみ、記憶の再生を誘う。忘却を怒る。アナムネーシス（想起）を無言で呼びかける。》忘却とのたたかいは「アナムネーシス（想起）」とのたたかいに必然的に移行する筈だ。忘却しないことは想起しつづけることにほかならないから。今回の拉致問題で大きく浮き彫りにされたテーマの一つは、想起ということである。突然いなくなってしまった娘や息子を肉親が諦めることなく数十年にわたって想起しつづけてきたことがやがて途を開くことになったし、日本に帰国した拉致被害者もまた、彼ら自身の想起に誘われて故郷の土を踏んだのである。

さて、冒頭の風太郎青年の日記に戻ろう。前述したように、敗戦後の在日の暮らしを活写した映画『夜を賭けて』が故山田風太郎の『戦中派焼け跡日記 昭和21年』に向かわせるきっかけになった。それには次のような毎日新聞(02.8.16)のエッセーが、頭の隅に引っ掛かっていたことが介在している。関西大学名誉教授小山仁示のその文章には、45年8月15日の《「終戦」の実態を物語る三つのエピソード》が記されている。

一つは、《終戦直後の新聞は、原子爆弾の非人道性を繰り返し報道した。GHQ（連合国軍総司令部）のプレスコードが通達される9月21日までの一カ月余り、日本の新聞は原爆報道に熱心であった。》ことである。8月15日敗戦当日の《毎日新聞は、被爆者の体験談に基づいて、原子爆弾の残忍性を浮きぼりにした記事を掲載した。そこでは「毒ガス以上の非人道的な殺人用具」「ただ一筋に人類の滅亡を急ぐ最大の凶器」との表現が使われていた。23日の記事には「その残虐性は全人類の名をもって、これを徹底的に糾弾すべきことを痛感」とある。》朝日新聞も盛んに取り上げており、《終戦後の僅かの期間、私たちは原子爆弾に関する情報を新聞から得ることが出来た。そのときに得た知識は、その後の原爆関係報道が極度に押さえられた占領下であって、私たち日本人が原爆反対の平和運動にたちあがる素地の一つとなったことは確かである。》

もう一つは、当時の大阪・吹田警察署長、西沢与志雄の日記によると、敗戦翌16日、署で終戦の詔書奉戴式が行われ、西沢署長が「内心屈辱を感じることあるも、人民保護者たる警察官は上陸し来る敵部隊の御機嫌を取る必要もある」と訓示し、「承諾必謹」（終戦の詔書を謹んで守ろう）の時代が始まったことである。《西沢署長は、前日の日記に「正午、天皇陛下御自らの御放送を拝聴し、署員とともに涙を流す。帝国復興を強く誓った」と記している。この署長が占領軍の機嫌をとってでも人民を保護するのが警察官の使命だと署員に訓示したのである。／終戦の翌日に早くもこのような方針を打ち出せる署長が存在した事実、ここに日本警察の強さ、したたかさを私は感じる。講和条約発効の1952年4月までの6年8カ月、アメリカ軍占領下で日本支配層がとりつづけた態度を大阪の一警察署長が終戦の翌日に明確に表明したのである。》

最後に、中学生であった自分の体験に触れ、《日本人にとっての敗戦は、朝鮮人にとっては勝利であり、解放だった》ことである。《1945年8月15日、戦争が終わった。当時、私は大阪市生野区猪飼野に住んでいた。私たち日本人は敗戦を悲しみ、虚脱状態におちいていた。／ところが、あちこちの朝鮮人が住んでいる家々からは、まことにささやかではあるが、酒を飲み、歌いおどっている声が聞こえてきた。日本人にとっての敗戦は朝鮮人にとっての勝利であり、解放だったのである。日本人と朝鮮人の混住のまち、猪飼野に住んでいたからこそその貴重な体験であった。／朝鮮人だけではない。中国をはじめ、アジア・太平洋地域の人々の多くにとって、日本が戦争に負けたことは大きな喜びであった。このことを忘れてはならない。》

「このことを忘れてはならない。」と結ぶのであれば、どうしてこの文章の中で一貫して「敗戦」という言葉を用いずに、「終戦」という言葉を用いるのか、疑問に思う。「私たち日本人は敗戦を悲しみ、虚脱状態におちい」る一方で、朝鮮人も中国人も日本の敗戦を喜んだことを「忘れてはならない」というのであれば、我々日本人こそそのことを肝に銘じるためにも「終戦」ではなく、「敗戦」という言葉を用いなければならなかった筈である。もちろん、単なる言語の言い換えではない。風太郎日記にも、《「敗けた」この観念は皆ははっきり今は痛感している。（中略）どこに行っても誰の胸の皮膚を剥いで

も見出されるのは再起復讐の心のみであることを発見する。》とある、当時の日本人が味わっていたこの気持ちをあらわすのは「敗戦」という言葉であって、「終戦」という言葉ではありえないのは明白である。それなのに「終戦」という言葉を用いたがるのは、敗戦当時の日本人を覆い尽くしていた屈折した心情を隠蔽しようという魂胆だったのでなかったか。もちろん、日本各地を占領した連合国軍を日本政府もマスコミも進駐軍といって、占領という現実から目を逸らしたのも同様であった。

この《「終戦」の実態を物語る三つのエピソード》のうち、興味を惹いたのはいうまでもなく、日本が戦争に負けて在日朝鮮人たちが大喜びした点である。大喜びしただけではない。それまで日本人に虐げられて小さくなっていた在日朝鮮人たちが敗戦を機に、意気消沈している日本人を前に急に態度がでかくなって威張り散らすようになったことも付け加えておかななくてはならない。風太郎日記の7月11日(木)、夜渋谷東横映画に行ったときの記述はこうである。《経営者朝鮮人なるものごとし。出入する客も朝鮮人少なからず、闇商人、闇食料店の大半は華人朝鮮人にあらずやと思わるるばかりの彼等の活動 旺 なり。亜細亜の植民地に華僑の経済的実力牢固たるものあり。将来の日本またこれに類するに非ざるか、憂心押えがたきものあり。パルザック『闇黒事件』を読む。》

そして先に抜き書きした8月11日(日)の日記の中の、《近傍の朝鮮建国促進同盟(?)のクラブの二階に半島青年ら放歌鼓舞して近隣を圧す。日本人小さくなりてこれを仰ぐのみ。近來朝鮮人の横行目に余り切齒するもの 甚 だ多し。否日本人の談話中必ず将来朝鮮に目に物見せてくれんとの激語沈鬱に囁き交わさる。されど余思えらく、朝鮮人の挙動のみに目に目^{かど}立つるはあたかも姑の嫁いびりのごとく大人げなし。》という記述である。

敗戦の45年生まれの子は戦後世代であるけれども、自分の両親、特に父親を通じて敗戦から数年経過していても、虚脱状態に陥って意気消沈した大人たちの姿を目の当たりにしてきた。女よりも男が元気がなかった。戦争に敗けた男どものやるせなさを膚で感じ取っていたように思う。近所に筒抜けのド派手な夫婦喧嘩も日常的で、なにしろ貧しく暗い時代であった。後に大人になってから、私は当時の時代の暗さについて米に戦争で敗けたことと、それまで軽んじ押さえつけてきた在日朝鮮人に敗戦を機に日本人が馬鹿にされるようになったことの二点が主な理由であると今までずっと思い込んできた。ところが風太郎日記によれば、45年8月8日のソ連の対日宣戦布告こそが日本人にとって最大に致命傷であったのだ。日記をつけていた頃の風太郎青年は、ソ連の対日参戦がヤルタ会談の最終日に、ドイツ降伏後二、三カ月以内にソ連が対日参戦し、その代償としてソ連に対し、満州における優先的利益と南サハリンの返還、千島列島引き渡しを米大統領ルーズベルト、ソ連首相スターリン、英首相チャーチルの間で密約していた歴史的事実を知らなかったのだろう。もし知っていたなら、ソヴィエットへの怨みのなかに米英も入っていたかもしれない。

風太郎日記では、《米国は少くとも堂々と日本と戦って日本を敗^{やぶ}った。その結果として、惨酷な賠償を強要し、原子爆弾棚上げの八百長裁判を行っても吾々は文句はいえな

い。男らしくこの苦痛に耐えよう。》在日朝鮮人の目に余る横行についても、日本人が彼らに行ってきたこれまでの仕打ちを考えるなら、《朝鮮人の拳動のみに目に^{かど}角たつるはあたかも姑の嫁いびりのごとく大人げなし。》《しかしソ連は何であるか！いきなり背後から刃をつったてるような卑劣奸悪な国ではないか！》と激しく憤る。《ソヴィエットに対する怨みは陰鬼のごとく胸にたぎらすを要すべし。彼や窮鳥懷に入るをシカと認めて後その胸に刃刺したる獵師のごとし。ポツダム宣言を自ら破りて吾將兵を未だシベリヤに苦役せしむ。満州より巨大の施設を奪いて、賠償はまた別にこれを取らんとす、その貪欲にして酷薄非道なる全日本人の千載に忘れ得ざるところなりとす。》というように、ソ連への怨みは骨髓に達する凄まじさである。

そういえば、当時の大人たちは近傍の在日朝鮮人たちを馬鹿にして差別していたけれども、それ以上にソ連のことを激しく嫌っていて、アカのいうことは信用ならん、と露骨に吐き捨てていた。ソ連の裏切りを念頭においていなかった子供の私たちは、大人たちのその口汚い罵りが理解できず、後年は史上初の社会主義国家誕生に対する無智と偏見の所為とずっと思い込んできたが、風太郎日記に接して自分たちの思いこみが間違いで、当時の大人たちが味わって^るいた口惜しさに初めて触れた思いがした。大人たちは子供にむかってソ連嫌いの理由を^る縷々説明するようなことはなかったが、それにしても一緒に暮らしていながら大人の痛苦^{かけら}の欠片ほども子供の私たちには伝わっていなかったのだ。

当時の大人の心情をありのままに記している風太郎日記は、敗戦間もない頃の子供時代のさまざまなことを想起させてくれる。大人たちのアカ嫌いの理由について私たち子供がずっと気づくことがなかったのは、ソ連や中国や北朝鮮のアカを信奉する当時の学校教師の所為でもあった。労働者の祖国たる社会主義国家の理想を遠くから仰ぎみていた多くの教師たちが、内実は大量粛清の嵐に吹き荒れていたソ連を賛美しても、悪く言う筈がなかった。敗戦直前のソ連の裏切りにしても、当時の教師たちからすれば、軍国主義の悪^{こんげ}の権化である日本帝国主義の敗戦を決定づけたのであるから、ソ連の裏切りはむしろ称賛される行為であった。そんな教師たちに日々感化されている子供たちが、アカを毛嫌いする近所の大人たちに馬鹿にした目付きを向けるようになるのは自然の成り行きだった。

だが、山田風太郎の目は曇らされてはいなかった。裏切りは裏切りであった。裏切っにおいて他国の領土を乗っ取るような社会主義国家であるなら、どんな理想的な言葉を振り撒こうとも、そんな社会主義国家は一切信用しないし、《ソ連は実に骨をすすっても飽きたらぬ日本永遠の敵である》と断言する、理想に足をすくわれずに現実を直視する一人の青年が日記の背後には凜といた。大国のソ連が正しいか、極東の小さな島に棲む一人の青年が正しいか。歴史がどのように歩んだかはいうまでもなからう。その風太郎日記に私を向かわせることになった映画『夜を賭けて』は多くの映画評にもみられるように、映画の出来映えは優れているとはいいいがたい。意余って言葉足らず、の感といえよう。ただし、58（昭和33）年頃の、大阪造兵廠が戦時中の米軍の大空襲で廃墟となってしまったあたりを舞台に、夜な夜な貧しい在日コリアンたちが日本の官憲の目

を盗んで、廃墟から兵器の鉄クズを掘り出しては舟で運んで金に換え、そして川向こうの在日コリアンの集落で密造酒を飲んでは大喧嘩をするという、アナーキーな日々明け暮れる、たぶんいまはもうなくなってしまった「暑苦しさ」の雰囲気は十分に伝わってくる。

直木賞候補となった梁石日ヤンソギルの小説の映画化であり、劇団・新宿梁山泊の座長・金守珍キムスジンが映画初監督に当たった。ニュース・フィルムなどを巧みに挿入しながら、映画はスタートしていく。ある日、集落の住人のお婆さんが造兵廠跡から鉄屑を掘り出し、大金を得たことから、住人たちも皆で鉄屑を運び出す算段をしていた時、おりしもかつて集落にいた金義夫（山本太郎）が三年ぶりに戻ってきた。義夫たちは警察の目を掻い潜り、総出で鉄屑を舟で運び出す。リーダーシップを発揮するたくましい義夫をみて、孤児の娘初子（ユー・ヒョンギョン）はひそかな思いを懸ける。そんなとき、父と兄を殺して服役していた高山健一（山田純大）が帰ってくる。やくざの手先となった健一は義夫と対立し、初子にもよこしまな想いを抱き、他方で窃盗の現場を押さえようと取り締まりに躍起になる警官隊と義夫たち「アパッチ」（註 - 西部劇のインディアンになぞらえて、そう呼ばれていた）との攻防戦も激しさを増し、警察と住人たちとの最後の対決が迫る。

この映画について書く気になったのは、在日コリアンが身近にいた私の少年時代の記憶が懐かしく想起されたからであり、更に日本列島が拉致問題で大きく揺れる最中にこの映画が偶然上映されることの意味について考えてみたかったからである。まず少年時代における在日コリアン体験について記すと、小学校時代の彼らを代表しているのは、宋兄弟であり、金田兄弟であった。校区の西と東に分かれて居住する彼らは喧嘩のチャンピオンであり、我々日本の餓鬼どもは彼らを恐れて小さくなっていた。今から思えば、敗戦後十数年が経過してもおとなしかったのは日本人の大人ではなかった。大人のおとなしさが餓鬼にも反映していたのだ。日頃から疎外され差別されて、掘っ建て小屋等の劣悪な居住環境で暮らしている在日コリアンは映画の登場人物同様、毎日荒々しく吠え狂っているように感じられて、豚の飼育等で辺り一面異臭の放つ彼らの地域に踏み入るには相当の勇気が必要であった。

覇権争いを巡ってぶつかりそうになりながらも、同じ在日コリアンということで賢明にも彼らは衝突を避けていた。映画の中に溢れ返っている在日コリアンの放埒ほうらつなエネルギーから、思わず50年程前の少年時代の宋兄弟と金田兄弟を想起したが、実際の彼らは映画以上に餓鬼ながらに不逞な面相で常に捨て身の雰囲気ふていを漂わせていた。もし彼らと殴り合いにでもなるなら、五体無事に済まされそうにないという気がして、日本人の餓鬼はどんな悪たれでも彼らを避けていた。少年時代の私にとってあの怖さは尋常のものではなかった。その後中学や高校へ進むに連れて日本名の在日コリアンの何人かと付き合うことになったが、彼らからはもはやどんな恐怖も感じることはなかった。世の中の景気が上向くにつれて在日コリアンの居住環境も改善され、豚小屋と隣接したバラック帯もやがて姿を消していった。

敗戦後の社会を生き抜くのに日本人は必死であったが、それ以上に劣悪な環境に放り

込まれている在日コリアンのなりふりかまわぬ裸形のエネルギーが映画から伝わってくるが、少年時代のあれこれを走馬燈のように思い浮かべながら、私が餓鬼の頃に見た在日コリアンの殺気に満ちた猛々しい面相に恐怖と同時に憧れをひそかに抱きつづけていたことを、久方振りに想起することになった。金守珍監督は映画パンフの中でインタビューに答えて、《小説で描かれているのは、この日本で僕ら在日が生きていくために必死に何かに向かっていく、夜や闇という見えないものから手探り状態で何かを掘り出していく姿なんです。(…)表現者として、この闇を表現したい、そう思ったんです。/ただ、これはやはり日本の中での物語だし、日本人の中にある闇にも向かって行かなくてはいけない。》と答えている。

この映画の欠点はまさに、「闇を掘り出していく」作業量の少なさにあると指摘できるかもしれない。確かに廃墟地帯の夜の闇にうごめく在日コリアンの集団は描写されているけれども、しかし、その夜の闇はもちろん、監督が掘り出そうとする「闇」とは異なる。在日は深い闇を抱えこんで生きている筈だから、彼らを描写すれば、同時に彼らの闇も表現されるというわけではない。そこに勘違いがある。だから在日のある時期の生き様を描いたかもしれないが、彼らを抱き込んでいる闇を表現したことにはならなかった。在日ではなく、在日の向こうにいる一人一人の人間を描写しないかぎり、人間としての闇は表現されようがなかった。闇は在日をではなく、個々の人間をすっぱりと覆い尽くしていたからだ。

映画の中でもその頃から始まった帰国事業に従って北朝鮮へ仲間が旅立とうとするシーンが描かれている。日本に残れば、官憲の弾圧を喰らって集落も押し潰される地獄の状況の日々である。帰国事業の結末がわからなかった当時からすれば、帰るは極楽、残るは地獄と思われていた筈である。北朝鮮へ帰る数人が土手で見送られるシーンがあり、映画を撮るほうも観るほうも彼らが北朝鮮でどのような扱いを受けるか、をすでに知っている。しかし、当時は誰一人知らない。そうであるなら、別れは辛くとも、帰国する彼らのほうが残る者たちに較べて燦々^{さんさん}と輝いているにちがいはなかったし、送るほうはもっと羨望の表情を湛えていてもよかった。ところが映画ではそうではなかった。送られるほうはその将来を暗示するかのように、どこか精彩がなく、はかなげな感じを漂わせていた。彼らを映しだす複線には帰国事業の結末がすでにわかっているように思われるほど、彼らの帰国は死出の旅にみえて仕方がなかった。もちろん、観客は帰国事業が出てくるなら、どうしてもそう見るのを避けられない。だからこそ、映画は結末などわかっていなかった当時の希望や歓喜に包まれるなかでの彼らをより一層描写しなければならなかった。「闇」は彼らが最後にみせたにちがいない破顔に隠されている筈だった。だが映画はそのように描かず、寂しい旅立ちになってしまい、残った者たちは官憲との戦いに意気揚々と挑むことになった。「闇」の描写は避けられたのではなかったか。

2003年1月13日記